

心豊かに生き抜く力を育む学校づくり ～ つながりを育てる学習指導の工夫 ～

加賀市立山代小学校

1 事例の概要

(1) 研究の内容

本校では、平成15年度より「心豊かに生き抜く力を育む学校づくり」の主題で研究を行っている。子どもたち一人一人の生きる力を育てる中で最も重要なものは「人間関係を結ぶ力」と「確かな自分を持つこと」であると考え、それらの力を「心豊かに生き抜く力」として研究を進めてきている。

これまで、研究主題の具現化に向けて様々な副題を設定してきたが、本年度は、昨年度までの研究の成果と課題を踏まえて、算数科を中心とした全教科で児童の「つながりづくり」に焦点を当てて研究を進めることとした。

(2) 研究の方法

以下の3点を授業作りの柱とし、授業をすることの中で児童の仲がよくなっていく学習方法を研究することとした。また、様々なつながりを深める行事も継続して行うこととした。

- ・一人一人に自分の思いを持たせる授業をめざす。
- ・一人一人の思いを聞きあう授業をめざす。
- ・一人一人の思いを話し合える授業をめざす。

A-1 研究全体構想図

2 実践内容

(1) 授業づくり …… めざす授業像の共通理解

本校のめざす授業像を職員間で共通理解し、どの学級でも同じ授業のパターン（山代小学校の授業パターン）を構築することをめざしている。めざす授業像として、以下のように学習段階とそれに応じた「つながりづくり」の場の設定について共通理解を図って授業実践を行ってきた。

・「つなぐ」段階（インフォームドコンセント）

授業の目標・目標を達成するための方法・ルールについて授業のはじめに児童と共通理解し、児童が意欲的に活動できるようにしている。

・「ふかめる」段階（ねらいに応じた場の設定）

授業の目的を達成するだけでなく児童のつながりを深めるために、グループ活動・相談タイム・聴き合い活動など様々な場を設定する。

・「まとめる・つなぐ」段階（振り返りの場の工夫）

友達の良さに気づいたり、思いや考えを分かち合ったりする場を授業の最後に持つことで、学習に対する達成感や周囲に認められた満足感を児童に持たせる。

(2) つながりを育む行事の継続 …… 縦割り活動の充実

縦割り活動を継続して行うことで、児童のつながりを結ぶ力の向上をめざして、以下のような取組みを実施している。

・縦割り集会

大きな規模の本校では、高学年の児童の活躍の場を増やすことと全校児童の学習発表の場を増やすことを目的として、縦割りの学級単位で集会を行っている。

・お世話活動

「ピア・サポート」の活動を高学年の低学年に対する「お世話活動」と位置づけ、児童会が中心となり天候の不順な梅雨時に高学年の教室を「遊びのお店」として解放する活動である。

B-1 振り返りのめやす

B-2 学校行事等の年間カリキュラム

3 指導の実際

「めざす授業像」の具体例として、例えば6年生の算数科「比」の単元での、ある1時間の授業の展開において、以下のように「つながりづくり」の場を設定して授業を実践した。

学 習 活 動	支援◎・評価☆	研究主題との関連
1 前時の学習を振り返る。 2 本時の学習のめあてを知る。 同じ味になる秘密を探ろう！！	◎2つの量の関係や変化の仕方について確認する。	(インフォームドコンセント) ・本時の学習の課題を明確にする。
3 前時に作ったコーヒー牛乳の分量をひとつの表にまとめ、気付いたことを話し合う。 公倍数？公約数？ もとにする量を・・・ 量？？割合？？？ 共通しているのは・・・	◎作り方の違いと共通点に目を向けさせる。 ◎変わるものと変わらないものをおさえる。	(ねらいに応じた場の設定) ・表を見ながら考える時間を確保する。
4 2つの数量の割合の表し方をまとめる。 5 本時の振り返りをする。 図を見て2:3に気付けた。▲▲さんの4:6でもいいという考えがいいなと思った。 どれも違うものだと思っていたけど、○○さんの図の説明でどれも2:3だと気付けた。	☆比の意味と表し方を理解している。	(振り返り) ・振り返りを行い、自分のできたことや友達のよかった所に気付かせる。

C-1 指導案

4 成果と課題

(1) 成果

授業のパターンを共通理解し、授業に振り返りを導入することで児童の様子に大きな変化が生まれてきている。一つは、授業の振り返りの場で他の児童から認められることにより、これまで授業に参加できなかった児童が学習に参加できるようになってきている。二つ目は、振り返りがあることを児童が意識することで他の児童の発言をしっかりと聞こうとする雰囲気が生まれ、学習内容の理解も深まってきている。

また、縦割り活動と異学年交流の継続的な実施により、高学年の児童と低学年の児童が仲良くなってきた。また、下級生と活動する場が増えた高学年児童は、その経験から自信を持ち、意欲的に学習や他の活動にも取り組めるようになってきている。

(2) 課題

今年度、算数科を中心に研究に取り組んできたが、その成果をより客観的に検証するために、教科学習に対する児童の満足度をアンケート調査するなどの方法により具体的な検証を進めて、その結果を今後の研究に生かして行くことが重要であると考えている。

事例47

より豊かに自分を表現する子 ～ 「話すこと・聞くこと」を中心にして ～

小松市立月津小学校

1 事例の概要

(1) 研究の内容

子どもの実態から、たどたどしくても『自分の言葉で考えや思いを伝え合える子』『お互いのよさを認め合える子』を目指し、学校生活に生かされる「話す力」「聞く力」を育てたいと考え、学校の文化づくりを土台とした研究構想を立てた。その構想を実現するためには、教師も子ども達も共通に「あのゴールをめざしたい!」という「目標」を明確にもち、話したい、聞きたいという「意欲」をもって、学習を進めたいと考えた。そこで、昨年度より、「目標」と「意欲」を主軸に据え、目標と意欲が相互に高められることを意図しながら、様々な取り組みを進めている。さらに、昨年の取り組みの成果として、話す力を書く力につなげることができたことから、本年度は、話す力と書く力の相互の関連を意識して研究を進めている。

A-1 研究の構想図

A-2 めざす子ども像

(2) 研究の方法

6年間を見通した「話すこと・聞くことの系統表」や「各学年の年間計画表」を作成し、本校としての取り組みの重点を決め、見通しをもって実践する。

また、研究推進委員会が中心となり、低・中・高学年の各実践部や、企画部（学校文化部・基礎基本部・情報発信部）との連携を図りながら研究を進める。

B-1 話すこと・聞くことの系統表

B-2 研究の組織

2 実践内容

「目標」と「意欲」を主軸にした取り組みとして、以下のような取り組みを進めた。

(1) 学習指導案の工夫

目標と意欲を、私たち教師が、常に意識して研究を進めていきたいという思いから、指導案の中に、「目標にせまるための支援」と「意欲を高めるための支援」を表記した。単元計画の中に表記することで、授業者が何のために支援するのかが意識でき、子ども達の意欲を高め、目標にせまらせるためには効果的だった。

(2) 他の単元・他の教科等との関連

国語科の中の「読む」単元や「書く」単元と関連させたり、総合的な学習や社会科などから題材をつなげたりして、子ども達に伝えたいと思える単元や題材を考え、相手意識や目的意識を明確にする工夫をしてきた。特に、国語科の読む単元や書く単元とつなげて題材を考えたことは、話す力・聞く力の向上に効果的であったばかりでなく、書く力を高めることもできた。そこで、本年度は、話すことと書くことの関連を意識して研究を進めている。

(3) 学習すごろくの活用

他の単元や他の教科を関連させるため、取り組む期間が長くなっても目標を見失わないように、学習すごろくを活用した。学習すごろくを活用することで、子ども自らが学習の見通しをもち主体的に学習を進め、教師と子ども達がゴールを共有できると考えたからである。

当初、学習すごろくのゴールは活動を示すだけであったが、具体的な学習のポイントを示し迷ったときの指針とすることで、子ども達の主体的な学習を促すことができた。

(4) 「つなぐ」を意識した取り組み

子ども達が、伝え合う中で友達の考えや意見を聞き、「友達の話をつなぐ」「自分の体験とつなげて意見を言う」「既習の学習とつなげて話す」「友達と自分の考えとを比べて話す」ことを意識させてきた。また、教師が、「教材をつなぐ」「教師が子どもの話を聞き取り、つなげて、返す」ことなど、「つなぐ」ための教師の役割についても考えてきた。

(5) 学習形態の工夫

目標にせまるために効果的な学習形態を考え、1時間の授業のなかでも、ペア、グループ、一斉など様々な学習形態を取り入れてきた。ペア、グループでの話し合い活動の後には、全員でそのふり返りを行い、学びを共有して、次の学習へつなげていった。

(6) 保護者との連携・啓発

話すこと・聞くことでの学習のめあてを保護者に知らせ、子どもの話を聞いていただいた。そのことにより、保護者は、言葉をかける観点を理解することができ、めざす子どもの姿を教師と共有することができた。子ども達は、家族に誉められることで、学校での活動に自信を持ち意欲的に取り組むことができ、その結果、目標にも近づくことができた。

C-1 単元計画・評価計画

C-2 指導案

C-4 学習すごろくの例

C-3 他の単元・他の教科と関連を図った例

C-5 保護者との連携の資料

3 成果と課題

(1) 成果

国語科の他の単元・他の教科等との関連の工夫では、それぞれの単元や教科のねらいを明確にすることの大切さ、そして、そのねらいを達成するための適切な言語活動を準備し活動の意味を明確にすることの大切さに気付くことができた。また、学習すごろくの活用では、教師と子ども達がゴールを共有しながら主体的に学習を進めることができ、「目標」実現のための「意欲」化につなげることができた。

さらに、つなぐことを意識した授業展開では、対話型の授業により、「話す力」以上に「聞く力」の大切さに気付くことができ、『お互いのよさを認め合える子』という目指す子ども像に近づくことができた。保護者と連携することでは、学習に対する子ども達の意欲が高められたと同時に、保護者の学校研究に対する意識も高められた。

(2) 課題

今後は、以上のような本年度の成果を継続し、さらに、対話型の授業を中心にして、話す力・聞く力と書く力や読む力との関連を意識しながら研究を進め、量的・質的な国語力全体の向上を目指し、伝え合う力を高めていきたいと考えている。

そして、豊かな心をもった子ども達が互いに豊かな人間関係を育みながら、『より豊かに自分を表現できる』の姿を求め、研究を前進させていきたいと考えている。

自ら考え、発信する子の育成

～ 考える場を工夫した授業づくりをとおして ～

白山市立広陽小学校

1 事例の概要

(1) 主題設定の理由

現在、学校教育には、社会の変化に対応するため、子ども達に、確かな学力、豊かな人間性、たくましく生きるための健康や体力などの「生きる力」を育むことが求められている。

一方、本校の子ども達に目を移してみると、自分で考え、判断して行動したり、周囲の人とうまくかわりながら、物事に取り組んだりするといったことはあまり得意とは言えない。また、授業でも、事実を問うような簡単な発問には意欲的に答えるが、自分の考えを話したり書いたりするとなると、まだまだ自信をもてない子が多い状態である。

このような教育の現状や子ども達の実態をふまえて、一昨年度より、「自ら考え、発信する子の育成」を主題に掲げ、研究に取り組んできた。また、考えることで発信内容が決定づけられ、発信することで自らの考えが整理されたり、他の考えとの比較から共通点や相違点を理解したりするなどの思考の深化が始まると考え、副題を「考える場を工夫した授業づくりをとおして」とし、授業の中での思考場面の位置づけや教師の指導・支援のあり方を研究することとした。

(2) 研究の視点

◎低・中・高別のめざす子ども像に迫る具体的な手だて（指導・支援のあり方）を考え、授業研究にもとづいて6年間をとおした系統的な指導のあり方を模索する。

- ・ 思考を促す学習過程のあり方の工夫（学習課題、学習活動、指導・支援・評価の工夫）
- ・ 教科・単元における思考力・思考場面を明確にするための教材研究
- ・ 「話す」「聞く」「書く」のつきたい力を育成するための指導・支援のあり方の具体化

A-1 低・中・高別のめざす子ども像

2 実践内容

(1) 思考を促す授業づくりの視点

本校では、めざす子ども像に迫るために、次の4点を授業づくりの視点とし、授業実践に取り組むことにした。

- ① 考える場を保障した課題解決型の学習過程
- ② 学習意欲を喚起し、思考を促す学習課題（追究課題）の設定
- ③ 豊かな思考を生み出すための、五感をとおした学習活動の工夫
- ④ 子どもの思考を支援する板書の工夫

(2) 「話す」「聞く」「書く」つきたい力の系統表

上記の授業づくりの視点を踏まえて、教師が如何に授業づくりを工夫したとしても、子ども達に「話す」「聞く」「書く」などの基本的な学習技能が定着しなければ、考えを出し合い、それを交流することで課題解決を図っていく授業を行うことは容易ではない。そこで、「『話す』『聞く』『書く』つきたい力の系統表」を作成し、それをもとに、どんな力を身につければいいのかを子ども達自身にも意識させながら指導していくことで、これらの力を育成したいと考えた。

(3) 思考力の育ちをどのように評価するのか（評価の方法）

- ・ 研究授業の指導案に目標、評価規準・評価方法を明記する。特に思考力育成に迫る手だてには☆印をつけ、授業の考察の視点とする。
- ・ 「めざす子ども像」に照らして、年度当初、学期末、年度末に児童の実態を協議し、思考力

の育成についての成果と課題を明確にしていく。

- ・ 年度当初、1学期末、2学期末に児童の意識調査を行い、それぞれのデータを比較することで、思考力にかかわる児童の意識を分析・評価する。

B-1 授業づくりの視点

B-2 低・中・高学年の具体的な取り組み

B-3 系統表

3 指導の実際

第3学年 社会科 「工場のしごと ～牛首紬をつくる工場 N産業～」

(1) 本単元でめざす姿：「考えをもち、聞き合う子」とは…

見学やインタビューなどで調べたことを交流し、牛首紬づくりに携わる人々の工夫や努力に気づいていく姿

(2) めざす姿に迫るための指導・支援の工夫

- ・ 牛首紬の製品を提示し、見たり触ったりする活動を取り入れ、色や肌触り質感などをとらえさせる。
- ・ 実際に愛用している方に牛首紬の特徴やよさについてお話していただくことで、本当に軽くて着心地のよい丈夫な着物であることを実感させ、〈N産業では、軽くて丈夫な牛首紬をどのようにして作っているのだろう〉という課題意識につなげていく。
- ・ 見学は、自分たちの予想を検証するという位置づけで実施し、一見しただけでは理解しにくいところは説明をお願いしたり、機織りを体験させてもらったりする。
- ・ 子ども達の考えを検証するために、N産業の方にゲストティーチャーとしてお話していただくとともに、「のべ引き」の実演をしていただく。



「のべ引き」の実演の様子

C-1 指導案

C-2 学習の様子

4 成果と課題

(1) 成果

研究主題「自ら考え、発信する子の育成」を設定して2年半が経過し、研究に取り組む以前と比較すると以下の点で子ども達の育ちが見られるようになってきた。

- ① 学習課題をつかみ、それに対して自分の考えをつくり、考えを交流することで課題を解決していくという1時間の授業の流れが、子ども達の中に定着しつつある。
- ② 学習課題に対して「自分の考えをつくろう」「考えを話そう」という学習に向かう意欲や構えが身についてきている。

上記の成果は、以下の取り組みによって、めざす子どもの姿、めざす授業像について教師間の共通理解が深められてきた結果として表れてきたものであると考える。

- ① 研究協議・教材研究の充実
- ② 発達段階に応じためざす子ども像の設定と具体的なイメージの共有
- ③ 「話す」「聞く」「書く」つきたい力の系統表の作成

(2) 課題

本校の研究主題にある「自ら考え、発信する子」や低・中・高別のめざす子ども像に照らしてみると、まだまだ到達しているとは言えない。そこで、以下の点を課題として授業改善を図り、めざす子どもの姿に迫っていきたいと考えている。

- ① 確かな教材観に支えられた学習課題、学習計画の改善
- ② 1時間（45分間）の授業の構成
- ③ 「話す」「聞く」から「話し合い」へ

学ぶ楽しさが実感できる学習をめざして

金沢市立安原小学校

1 事例の概要

- (1) 研究主題 学ぶ楽しさが実感できる学習をめざして
～算数科における学び合う姿を求めて～

(2) 研究主題設定の理由

本校では「学ぶ楽しさが実感できる学習」に迫るために、課題解決的な学習パターンの定着を図りながら一人一人を大切にした支援を行っている。その中で生じた授業改善の視点から、校内研究の充実を図り、教師力・授業力の向上をめざしている。本年度は特に算数科を通して学ぶことを楽しんだり、友だちの考えや活動を共有できたことを楽しんだりできる子どもの育成と「学び合いの場としての学校」を創っていきたいと考えている。

(3) 研究の概要

教育課程の見直し
授業改善



校内研究の充実＝教師力・授業力を高める

課題解決的な学習を通して、子ども一人一人の実態に即したきめ細やかな支援・学び合いやかかわり合いのある授業展開を行えば、基礎・基本の確実な定着が図れ、確かな学力を身につけさせることができると考え、授業改善の視点を4点に絞り取り組んだ。

- ① 課題解決的な学習パターン（安原モデル）の確立
- ② 学び合う姿のある活動
- ③ 支援と評価の工夫（認め合う活動 教→子，子←→子）
- ④ 教職員間での課題の共有

A－1 学校研究

2 実践内容

授業改善の4視点を整理し、個の学力向上・集団としての学力向上・教師の授業力向上を図るためにねらいに応じた取り組みを行った。

	ねらい	取り組み
1	基礎基本の定着	チャレンジタイム（算国 補充タイム）（毎週1時間）
2	個に応じた学力の育成	算数チャレンジプリントの活用
3	学習集団づくり	学習のルールづくり 子どもの育ち（学習面・生活面）の状況把握（年2回）
4	学力の実態把握	基礎学力調査（2～6年）
5	見通しのある授業づくり	安原モデルの積み上げ 中高 つかむ → 考える → 学び合う → まとめる 低 つかむ → 自分で → みんなで → まとめる
6	授業課題の共有	授業評価（年2回）

B－1 チャレンジタイム・チャレンジプリントの活用

B－2 学習集団づくり

B－3 安原モデル

B－4 授業評価

3 指導の実際

1年〈いちばんながいものをさがそう〉

4つの具体物の長さを比べる方法を考え、長さ比べをする

【学び合う】 予想や根拠をもって自分の考えを発表し、聞き合う
ペア学習（声かけ・協力）

5年〈平行四辺形の面積の求め方を考えよう〉

長方形に変形すれば平行四辺形の面積が求められそうだ！の予想をもとに、平行四辺形から長方形への変形を行い、どの変形も「縦×横」で面積が求められることを確認する

【学び合う】 考えを聞き合う（友だちの考え方を理解したり、その考え方を使って問題を解いたりできる）

C-1 1年 指導案

C-2 5年 指導案

C-3 1年 授業考察レポート

C-4 5年 授業考察レポート

4 成果と課題

(1) 成果

課題解決的な学習パターン「安原モデル」を全学年、どの授業でも共通化して行うことにより、子どもたちは授業の流れに見通しが持て、落ち着いて学習に取り組むことができるようになった。

「考えをもつ」場面で個に応じた支援の工夫・充実（ワークシート、ヒントカード、図、絵、テープ図、数直線図など）が見られ、子どもたちは自分の考えをもち、「学び合う」場での聞き合う姿につながってきている。

教師の支援では、学習履歴が次時に活用されるなど学習環境の整備を意識することで、前時までの想起や学習課題に到達するまでの時間短縮が図られ、安原モデルの「考えをもつ」「学び合う」場面に時間をかけることができ、学び合いを広げられるようになった。また、「まとめる」場面を大切にすることで、友だちの考えや発表の仕方の良いところを認めたり、新しい考え方に気づいた喜びを表現したりする子どもが増え、見方や考え方の広がるふり返りができるようになってきた。

学習集団づくりにおける「話し方の指導」については、授業評価等をもとに課題を分析し、基本的な話し方のパターンや教師のめざす姿の共通理解を図り、教師が模範となるよう心がけて指導することを確認してきた。教師は子どもの思いを多く汲み取るために「聞く姿勢」をもち、授業実践を行ったので、子どもたちの発言がにつながってきている場面が多く見られるようになった。

(2) 課題

安原モデルにおいては、子どもの実態に応じた教師の姿勢や支援を日々の実践の中からさらに積み上げ、全職員で共通理解しながら実践に活かしていかなければならない。

「つかむ」場面で解決意欲をもたせるための発問や教材提示の仕方が子どもの実態に合っていないために、「学び合う」場面での子どもの活動や考えが単調になり、学び合いが深まるどころまで到達できない場面も見られる。

子どもの考えやまとめ・ふり返りに対して、学習課題や次時の学習内容につながる適切な支援が十分でない場面も見られる。

研究授業だけではなく、場を設定しなくとも日常的に教職員間で課題の共有ができるような工夫が必要である。

D-1 1年 授業の様子

D-2 5年 授業の様子

「考える力」を育てる評価と支援

志賀町立富来小学校

1 研究の概要

統合初年度である昨年、「わかる算数、楽しい算数」の授業を目指し、研究体制づくり・指導法の模索・少人数指導の立ち上げ・評価規準の焦点化などに取り組んだ。児童には算数の学習をより楽しいと感じるようになる意識の変容が見られ、算数好きな子がかかなり増加した。算数を好きになっても算数に自信をもつ域にはなかなか届かないでいることから、本校児童が苦手としていることの克服が課題となった。

基礎学力調査等の結果により、計算は比較的速く正確にできながら、文章問題の解決に不安がある児童の姿が明らかになった。「算数ができるようになった」と感じるためには、文章問題の解決で考えを進める力を育て、達成感を獲得することが求められる。そこで「考える力」を育てるための効果的な指導と評価のあり方に焦点化して研究を進めた。

A-1 研究の構想図

2 研究内容 考える力を育てる評価と支援

(1) 評価規準の焦点化＜見取りのポイント＞

規準に到達しようとしているか否かを、児童のどのような具体の姿から見取るのか。効率的に、しかもしっかりと見取るためには、評価規準の具体化が必要と考えた。

例えば、5年「変わり方のきまり」の第2時では、「伴って変わる2量の関係を数が少ない場合から順に調べ、表に表してきまりを見つけ、問題を解決する。」という数学的な考え方に関する評価の規準がある。具体的に、どんな問題においてどのような考える活動を行えば、この規準の到達に向かうと見取るのか。

_____部を、本時により具体化させ焦点化した＜見取りのポイント＞は「正三角形の段の数とひごの数の変化に気づき、表の縦や横に線や数を書き込む。」となる。表の縦や横に線や数を書き込む姿をもって「きまりを見つけている」と見取るのである。

課題解決場面においては、この＜見取りのポイント＞で短時間に評価し、児童の次の活動につながる支援を心がけた。

(2) シール利用などによる即評価・即支援

＜見取りのポイント＞で「評価規準到達の方向に向かっている」または「到達している」「到達の方向に向いていない」と見取ってすぐに行うのが、個に応じた支援である。この個に応じた支援を、迅速にしかも評価記録にもなる方法として、事前に準備した本校独自のシールを児童のノートに貼る方法を開発した。到達の方向に向いているなら[その調子で]到達しているなら[ほかの方法で][発表できるよ]のシールを、到達の方向に向いていないならヒントカードを段階に応じて提供する。授業終了後には、必ずノートを回収し、シール貼付状況や適用問題のクリアの成否を確認する。この方法によって、課題解決時に児童の思考を支援し次の考えを伝える活動につなげるとともに、授業内での評価記録の不足を補い、次時にその評価を生かしていく。

(3) 変容を見取る＜考える力カルテ＞と＜算数日記＞

求める「考える力」のどれが身についてどれが未熟であることを単元ごとの＜考える力カルテ＞に記入していき、その変容を見取る。また、個々の未確認の力については、個に応じて声かけや質問等で確認する。また、単元の初め・中・終わりに記述する＜算数日記＞で、個の考えの変容を単元内及び長いスパンで見取る。自己評価として、この＜算数日記＞のほか＜ふり返りカード＞も活用する。

B-1 本校が求める考える力

B-2 考えを進める手がかり

B-3 学び合いのステップ

B-4 考える力カルテ

B-5 算数日記

B-6 ふり返りカード

3 指導の実例（6年 「体積」から）

(1) 見取りのポイントを設定し、評価基準の焦点化を図った。

（指導計画の第4時）

主 要 評 価 規 準	見 取 り の ポ イ ン ト
L字型の立体の体積の求め方を考えている。	L字型の立体の見取り図に補助線を引いて2つの直方体に分割したり、付け加えて大きな直方体にしたりして考えている。

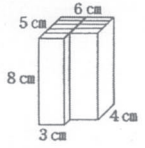
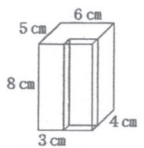
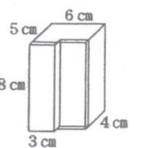
(2) 見取りのポイントを用いて即評価・即支援を図った。（発展的な内容を含むコースの指導案から）

学習活動

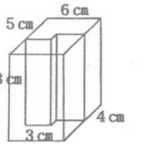
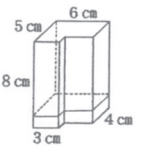
《L字型の立体の体積を工夫して求めよう》

2 課題解決をする

① 直方体に分ける ② 補って直方体にする ③ 変形して直方体にする

④ 2つで直方体にする ⑤ 1段目の何倍かで考えて

評価場面

見取りのポイント

L字型の立体の見取り図に補助線を引いて2つの直方体に分割したり、付け加えて大きな直方体にしたりして考えている。

手立て

考えが浮かばない子にはL字型図形を渡し求積方法の想起を促す。シール利用により、途中までの思考を認め他の方法での解決やより良い考えの検討を勧める。

C-1 指導案

4 成果と課題

(1) 成果

- ・評価基準の焦点化を図って設定した見取りのポイントにより、児童の活動の様子を効率的に見取ることができた。一人一人の児童の考えの過程を1つの具体的な姿を求めて見取することで、規準への到達が可能かどうかを評価し、状況に応じた次のステップへの支援を行うことができた。課題解決に向かっているか「すでに課題を解決しているか」「支援を必要としているか」を短時間に評価し、支援につなぐことができた。この取り組みにより「考えを進める力」を見取ることと「手がかりを生かして考えを進める力」が育ってきた。
- ・シールや付箋紙を使うことにより、個に応じた支援を効率よく行え、事後のノート回収で考えの変容や評価記録の確認を行うことができた。この取り組みにより「考えを進める力」を即評価し即支援できた。
- ・「考える力カルテ」により、個々の考えの変容を把握し、支援が求められる力を次時で指導していくことが可能となった。また、算数日記は単元内の考えの変容の見取りや本人の気づきに有効であり、同時に「自分の言葉でまとめる力」が確実に育ってきた。

(2) 課題

- ・評価記録の効率化を図るため、より有効な評価方法の開発が必要である。
- ・算数科を通して取り組んできた指導と評価を、他教科へ広げていかなければならない。特に、評価基準の焦点化を図る「見取りのポイント」を各教科に導入していくことが学力向上につながると考える。

D-1 取り組みの概要

D-2 児童の変容

確かな学力を身につけ、主体的に取り組む子をめざして

～ 課題解決的な学習を通して ～

輪島市立門前東小学校

1 事例の概要

本校では、国語科・算数科に焦点を絞り課題解決的な学習を中心に研究実践に取り組んだ。

特に、基本的な4段階の学習過程を設定し、機能させる課題解決的な学習を取り入れ、指導と評価・支援の一体化を図り、学力向上をめざした研究を進めてきた。その結果、児童が学習に見通しを持って意欲的に取り組み、自ら学び・考え・行動する姿が見られるようになってきた。

一方で、基礎学力調査や標準学力検査の結果を分析してみると、言語事項に関することや計算力は、良い傾向を示しているが、文章を確かに読み取る力や数学的な考え方などが十分に育っていないという課題も見えてきた。

そこで、授業では見通しを持って学習にあたり、「考える場」や「深める場」での言語活動や算数的活動の工夫により、確かな読みや数学的な考え方につながる指導を心がけてきた。

また、今年度は3校が統合して新しい学校になったこともあり、学級経営や家庭との連携もこれまで以上に気を配って学習を支える心の安定や基本的生活習慣の充実に努めてきた。

A-1 研究構想図

2 実践内容

(1) 確かな学力に向けての取り組み

本校では、確かな学力を「読み・書き・計算」をしっかり身につけた上での、「話す力・聞く力・思考力・判断力・表現力」と考えた。そこで、「読み・書き・計算」の力をつけるために、学校全体で取り組んできた。

① 学校全体での取り組み

- ・朝の読書タイム ・計算タイム ・全校テスト（年8回） ・児童集会での学年発表
- ・算数コーナーでの算数的な体験活動

② 家庭や地域との連携

- ・音読等共通な家庭学習 ・生活調査（年6回） ・保護者への説明会 ・学校公開
- ・図書ボランティアによる読み聞かせ ・学校評価アンケート

(2) 4つの基本的学習過程

4つの基本的な学習過程である「つかむ→考える→深める→まとめる」が機能している学習を繰り返し経験することにより、学習の仕方を身につけみんなで考えることの楽しさや、友達のよさに気づいてほしいと考えて取り組んでいる。

また、段階ごとに「子どもにつけたい力」と「教師の高めたい力」を明確にして、取り組みを進めてきた。

(3) 指導と評価・支援の一体化

特に、児童の実態を把握し、実態に応じた単元の計画を立てること・個に応じた手だてを準備すること・「ねらい～課題～まとめ」の一体化（整合性）を図ることを中心に行っている。

(4) 言語活動・算数的活動の工夫

体で学習したり、表現したりすることが重要と考え、いろいろな体験活動を取り入れて学習に臨んでいる。また、授業以外での活動も大切にしている。

B-1 4つの基本学習過程

B-2 授業を組み立てるにあたって

3 指導の実際 3年国語科 単元 大事なことをたしかめよう「すがたをかえる大豆」

(1) 指導のねらい

既習の「ありの行列」の学習を生かし、深める段階ではキーワードや中心文に目を向け、課題解決にむけて読み深める。

(2) 4段階の指導過程を明確にする。

- ① つかむ・・・課題「大豆をおいしく食べる工夫を見つけよう」をつかむ。
- ② 考える・・・キーワード（「くふう」）に着目して、5つのおいしく食べる工夫を見つける。
ワークシートに書く。
- ③ 深める・・・読み取ったことを話し合う。
書き出しの言葉に注目し、そのことから5つの工夫があることを理解する。
（「いちばん分かりやすいのは」「次に」「また」「さらに」「これらのほかに」）
- ④ まとめる・・・本時の振り返りをする。
課題に対する自分の考えを文章でまとめる。

(3) 指導と評価・支援の一体化を図る。

考える段階で、「大豆をおいしく食べる工夫を読み取っている」という評価規準で見取りをする。ワークシートの記入状況の観察をし、十分に読み取りが出来ていない児童には、本文中の「くふう」という語句に注目するように助言する。逆に、工夫を見つけた児童には、どのようにして工夫を見つけたのか考えるように指示する。

(4) 学習内容を確認し、がんばりを意識するまとめを工夫する。

大豆から作られた食品の絵カードを分類することで、5つの工夫について確かめをする。

C-1 指導案

4 成果と課題

(1) 成果

- ・「つかむ」段階で課題を工夫したり、見通しを持たせたりすることで、自分の考えを持てる子が増えてきた。
- ・ねらいにそったまとめと課題を意識することによって、指導と評価・支援の一体化が図りやすくなった。
- ・評価規準－評価場面－評価方法が具体化されつつあり、個に応じた支援の仕方が考えやすくなった。（ヒントカード・ヒントコーナー）
- ・国語の基礎学力調査の結果で、「主語・述語」についての定着が弱かったので、全校テストにいろいろなパターンの「主語・述語」の問題を取り入れた結果、今年度は県の通過率を4年生、6年生とも上回ることができた。
- ・学校全体で取り組んでいる全校テストや計算タイムにより成果がみられ、四則計算は概ね良好である。基礎学力調査の結果にも成果として表れていた。
- ・数量や図形についての感覚を豊かにするために、校内に「数量揭示」や「算数コーナー」を設けた。基礎学力調査の結果では、図形の面積を求める問題で、県の通過率を上回った。

(2) 課題

- ・「深める」段階で、児童同士の学び合いの姿が見られるよう、ゆさぶりのある発問や高め合う発問を吟味する必要がある。
- ・児童の話し合いの力をつけていかないと「深める」段階で十分に深まらない。
- ・児童のふりかえりをどう生かしていくか、またそれを次の授業にどうつなげていくかについて、考える必要がある。
- ・国語科で確かな読みにつなげるために、各学年継続して、文末表現に気をつけて読むことや、接続語に注意して読むことを指導していく必要がある。

学力の向上をめざし、生き生きと学ぶ生徒の育成

七尾市立香島中学校

1 事例の概要

(1) 研究目標

学校生活の基本は授業であり、授業がわかる、参加できることが生徒の自信を育てる大きな柱である。そこで、わかる授業、全員が参加できる授業に向けて授業での基礎・基本の徹底をはかり、生徒の自信を育てる。そのため、生徒の実態を正しく把握し、生徒自身が学力の向上を実感できるような評価方法の改善を図る。

(2) 研究組織

昨年度の生活実態調査からも、本校生徒の特徴として、学習面では「他人に依存する傾向があり、学習に対する心構えや取り組みがやや消極的である。」、生活面では「基本的生活習慣が確立していない生徒の割合が多い。」ということがあげられる。このような生徒の実態から、研究主題にある望ましい生徒像へ導くために、下記の2つの部会を組織した。

(学習面) 授業研究部会・・・評価のあり方、授業改善の方法の研究
(生活面) 生徒理解部会・・・生徒の実態把握、学習環境の改善

A-1 研究全体構造図

2 実践内容

(1) 全体の取り組み

- ① 評価規準表&年間指導計画表の書式の統一
- ② 学習指導案の書式の統一
- ③ 授業研究会の実施

(2) 授業研究部会の取り組み

- ① 2つの評価カードを活用した授業実践

ア Tカード・・・教師記入用評価カード

- ・評価規準に従って、その授業での評価規準を一人一人の生徒が達成しているかどうかチェックする。・・・形成的評価
- ・「単元」や「学習のまとめり」ごとにまとめて、毎時間の記録から一覧表を作成し、定期テストの状況などを加味しながら評定を行う。・・・総括的評価

イ Sカード・・・生徒記入用評価カード

- ・授業の最後に、生徒が1時間の授業を振り返り、「今日の目標」を考慮しながら「わかったこと わからなかったこと」を記入する。・・・自己評価
- ・「教師が楽しい授業、わかる授業をしているか」ということを生徒が評価するカードと捉え、授業改善に利用する。

ウ 2つのカードを生かした授業改善

- ・前時のSカード・Tカードの評価結果より、「評価規準」や「今日の目標」に達している生徒が多い場合と、少ない場合の導入に変化をつける。…「導入1」「導入2」
- ・授業の中ほどに、「Tカード」によって評価を行い、「評価規準に達している生徒への支援」と「評価規準に達していない生徒への支援」を用意する。

- ② 基礎学力調査の分析

ア 基本方針・・・生徒の基礎学力を多面的に捉える。

(例) 「単元別集計」、「学年別集計」、「分野別集計」、「観点別集計」
「解答方法別集計」、「誤答の傾向調査」など

イ 第2回基礎学力調査

夏休み中に同じ問題で2回目の調査を行い、生徒の基礎学力の変容を捉える。また、その変容から、指導方法・単元構成などを見直す材料とする。

ウ 分析結果をまとめ、その分析結果より「本校生徒につけたい力」を共通理解し、すべての教科の授業で工夫し実践する。

(3) 生徒理解部会の取り組み

① 家庭学習調査

毎日の家庭学習時間を調査し、パソコンにデータを入力する。1週間ごとの平均時間、分布状況等を「学年だより」などで、生徒や保護者に知らせる。

② 生活実態調査

「起床・就寝時間」「学習時間」「食事の習慣」「歯磨きの習慣」などの生徒の生活を調査し、昨年度の調査結果と比較しながら、生活習慣の改善状況などを把握する。

③ あいさつ運動・朝読書

学校生活の始まりが、さわやかで落ち着いたものとなるように、毎朝、生徒会を中心に校門前であいさつ運動を行う。(7:45～8:10)

また、教室に入ってから朝礼前に10分間の朝読書を行う。

B-1 Sカード

B-2 指導案

B-3 家庭学習調査結果

3 成果と課題

(1) 成果

① 授業研究部会の取り組み

- ・教師が、目標達成のために「授業の流れ」を考えることが多くなった。「今日の目標」を設定し、その授業の評価規準を確かめた上で、その目標をすべての生徒が達成できるような授業をめざすようになった。
- ・教師が、生徒の意識や理解度をより深く把握できるようになった。
- ・生徒が授業に一段と集中するようになった。「今日の目標」を授業の最初に確認することで、「何をすればいいのか。」を理解し、前向きに学習できるようになった。
- ・生徒の基礎学力を多面的に捉え、2回目の調査でその後の理解の深まりを知ることにより、授業改善のポイントが明確になった。

② 生徒理解部会の取り組み

- ・家庭学習時間が着実に伸びてきた。
- ・生活実態調査を行ったすべての項目で、昨年度より改善されてきた。
- ・生徒の生活状況や家庭学習時間を正確に把握することにより、教育相談などいろいろな場面で、より効果的なアドバイスができるようになった。
- ・授業をはじめ、いろいろな教育活動で積極性が高まり、学校全体に落ち着きが見られるようになった。

(2) 課題

2年間の研究によって、取り組みの方向性や基本的な実践内容は整備されてきたが、今後はそれぞれの取り組みがより効果的になるような、より具体的な手立ての充実を考えていかなければならない。また、基礎学力調査の分析結果などから、本校生徒の学力向上のためには「関心・意欲・態度」の向上に向けて重点的に取り組む必要がある。生徒の思考の流れに添った『問題解決型』の授業展開や生徒の発言や活動の多い授業を目指していかなければならない。

生徒一人ひとりの学習習慣の確立と学力の向上

～ 勉強を学びに近づける ～

輪島市立上野台中学校

1 事例の概要

(1) 研究主題設定の理由

生徒の学習・生活面の実態を次の4つの観点から見直した結果、本校生徒の喫緊の課題は学力の向上であると考え、研究主題を「生徒一人ひとりの学習習慣の確立と学力の向上」とした。

- ① 家庭での学習時間の状況・宿題の提出状況調査結果
- ② 定期テスト・県基礎学力テスト・NRT等から見た成績の分布状況
- ③ 生徒の食生活アンケート結果
- ④ 「上野台教育プラン」保護者アンケート結果

(2) 研究仮説

- ・学習習慣を確立し、「わかる・できる」授業実践を積み重ねることで学力が身につくであろう。
- ・人間関係づくりを深め、「かかわり合う力」を高めれば学力の向上につながるであろう。

A-1 上野台教育プラン

2 実践内容

(1) 授業力の向上と学習習慣の確立

授業を「教師主導型の授業」から「生徒がかかわり合う授業」に転換し、授業力の向上を図る。具体的な方策として、校内授業研究を核とした校内研修を推進する。3つの視点（課題をつかむ活動・課題にせまる活動・振り返る活動）を持って、教科の枠を超えた授業研究を実施する。また、定期的に学力の向上についての検証を行い、実践内容の評価修正を図る。宿題の工夫と中・高連携による毎日の学習時間調査を通じ、学習習慣の確立を図る。

(2) 学習を支える「かかわり合う力」の向上

「かかわり合い」を通して考えを深める授業をつくるためには、自分の周りにいる人とのコミュニケーションが不可欠である。本校では、特別活動と総合的な学習の時間の中で、特に「かかわり合う力」（対話力）の向上に重点を置いた活動の実践に努めている。

(3) 学習を支える学習環境づくり

学習環境は学習成果に大きな影響を与える。本校では日々の学習や活動の中に生徒指導の機能（自己決定、自己存在感、人間的なふれあい）を生かし、ハード・ソフトの両面から学習環境を整え、学力の向上につなげていきたいと考えている。

B-1 研究構想図

B-2 学力向上と学習習慣確立のための3ステップ

3 指導の実践

(1) 授業力の向上〔「わかる・できる」授業の実践〕

① 授業改善の視点の明確化

視点1 課題をつかむ活動の工夫

本校では、課題をつかむ活動の工夫により、「教師が課題を与える段階」から「生徒が課題を見つける段階」へ近づけていくことをめざしている。

視点2 課題解決にせまる活動の工夫

できるだけ多くの「課題にせまる活動」を考え、その中から最も「かかわり合い」の生まれ

やすい活動を取り入れていくことを共通理解している。学習形態を工夫し、生徒の発言を上手く拾い、つないだり広げたり深めたりするなどの適切な支援の工夫に取り組んでいる。

また、課題を解決できていない生徒には、必ず具体的な支援や指導を行うようにしている。

視点3 振り返る活動の工夫

課題追求の過程や結果を振り返らせ、生徒一人一人の学習の深まりを確認し合う場を設けている。振り返り活動の評価方法としては、自己評価（振り返りカード）や相互評価などを用いている。

② ステップごとの評価と指導

小単元やユニットなどのできるだけ小さな単位で評価を行い、目標達成度に応じて具体的な指導を行うようにし、指導と評価の一体化に努めている。評価の方法としては、行動観察、振り返りカード、教師自作の小テストや市販の単元別テストなどを利用している。

③ 学習カルテの活用

定期考査の後で、必ず学習カルテを利用してテスト勉強への取り組み状況を振り返らせている。自分の学習の弱点を把握し、克服するための学習計画を立てる時に活用するよう指導している。教師からのコメントも必ず書いて生徒を励ましている。

C-1 指導案

C-2 振り返りカード

C-3 学習カルテ

(2) 学習時間の確立をめざす宿題の工夫

① 学習習慣をつけるための宿題

英語マラソンノート（単語練習）を全学年に、数学計算ノートは1・2年生に宿題として課し、提出率100%を目指して学習の習慣化を図っている。

② 学力を伸ばすための宿題

県基礎学力調査の分析結果を基にして、学力をつける宿題を準備し、生徒に意欲的に取り組ませるようにしている。提出率より学習時間の増加と質の向上を目指している。

(3) 学習時間の調査

学習習慣の確立を図るためには、家庭での学習時間を確保することが大切である。そのため、中高連携を図っていく中で、高校から学習時間調査の成果や調査方法を学び、毎日の学習時間調査を6月より実施している。月末に集計し、学級活動の中で学習時間を増やすための話し合いや指導を行っている。

4 成果と課題

(1) 成果

- ・ 授業づくりに3つの視点を設けたことで、教科の枠を超えた授業研究を推進することができた。
- ・ 学習習慣をつけるための宿題（計算ノート、英語マラソンノート）の提出率80%以上はクリアできなかったが、力をつける宿題に取り組む意欲の高まりが3年生を中心に見られた。
- ・ 課題をつかむ活動・課題にせまる活動・振り返る活動の中で、少しずつ生徒同士の意見交流の場面が増えてきた。

(2) 課題

- ・ 3つの視点についてさらに焦点化を図り、指導構想図（仮称）を作成し、「授業を変えきる」まで、具体的な授業改善をする必要がある。
- ・ 学習習慣をつける宿題では提出率を100%に近づける工夫が必要であり、力をつける宿題ではその成果を検証する方法の確立が課題である。
- ・ 「かわり合い」のある学習活動を展開するために、対話力の向上の具体策を立て計画的・継続的な実践を推進する必要がある。